# 闇の狐

神楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闇の狐

【Ｎコード】
Ｎ２４８７Ｕ

【作者名】
神楽

【あらすじ】
怪異、闇に触れたあの日から其れ等は橘優の日常となった。
変わってしまった日々の情景は、無難に生きてきた彼には刺激的で、恐ろしくもあり心地よい。そして其れは次第に大切なものも映し出していく。

## 闇の狐（前書き）

初心者、処女作です。読みにくいかもしれません。
これはプロローグ的な話なので切らずに投稿しましたが、今後は一つの話を幾つかに分けて、短めに投稿するつもりです。

# 闇の狐

僕の住む街には異様な光景が在る。
其れは、街自体が異様であるというよりも、其処に一人の男が居る事によって、其の周りもまた異様に見えているのである。
彼の名前は夏目学（なつめさとる）という。街の人間からは年齢問わず「夏目さん」と呼ばれている。
夏目さんは、何時も高そうな3ピースのスーツ姿、そして顔には何故か何時も古ぼけた狐の面を着けている。
そんな姿で街中に居て、何の違和感も無いかの様に其の場に溶け込んでいる。其の光景は外の人間から見れば正に異様以外の何物でもない。
夏目さんは僕が五歳の頃からこの街に住んでおり、其の時から既に現在と同様の姿であり、当然、越して来た当初は誰もが怪しく思っていた。
彼が街を通る度、人々は白い目で見て彼から遠ざかった。
変な宗教だの、薬をやっているだの、そんな根拠も何も無い噂まで飛び交った。
だが、夏目さんはそんな事は全く気にしないかの様に振る舞い、街の人々がどれだけ恐れようとも構う事無く、どんどん話しかけては無理矢理にコミュニケーションをとっていった。
彼の堂々とした立ち居振る舞いは、其の人当たりの良い性格もあり、徐々に街の人々の意識を変えていき、半年も経った頃には、彼は完全にこの街の一員となっていた。今では、街の人間で彼を怪しむ者など誰もいない。この街に住む誰もが気軽に会話を交わしている。
とはいえ、どうしても小さな子供にはウケが悪い様で、よく街中で泣かれているところを目にする。かく言う僕も、現在十六歳にして未だ少しばかりの苦手意識を持っており、軽い挨拶程度しか会話

をした事は無かった。
そんな僕が夏目さんと初めて面と向って話しをしたのは、蒸し暑い七月の初めの事だった……

＊

「橘(たちばな)！今日皆で遊びに行くけど、お前も来るか？」
「悪い。今日も居残りなんだ。また今度な」
「え～、またかよ。優(ゆう)、要領悪いよな～」
クラスメイトとそんな会話を交わして別れてから、何時間が経ったのだろうか。すっかり日も暮れて、もう満月が街を見下ろしている。
僕は、ずっと学校の図書室に居た。
居残りというのは真っ赤な嘘だ。僕は逃げていた。他人と付き合うことが面倒なのだ。
僕はほぼ毎日、友人達の誘いから逃げそびれた日以外には、この場所で放課後を過ごしていた。
もし、友人達に見つかったとしても「勉強していた」と言い訳もたつし、何よりも僕は読書が好きだった。
この学校には二つの図書室があり、僕がいるこの第一図書室は少々奥まった所にあるので不便なうえ、オカルトめいた噂が後をたたないために、殆ど誰も寄り付こうとはしない。噂というものをあまり気にしない僕にとっては、逃げ場としてもってこいの場所なのである。
誰にも邪魔されずに一人、読書に耽る。其の時間がとても贅沢に感じられ、僕は幸福感に包まれた。
本のジャンルは問わず、目に付いた本を片っ端から読んだ。
参考書、哲学書、詩集、医学書、絵本、歴史の本、怪しげな黒魔

術の本、小説等々……。
勿論、解らない所もあるが、文脈からなんとなく読み取って解った気になる。此れもまた好きな瞬間の一つであった。
この日は、怪談物の短編小説集を読んだ。
普段、僕はこの手のものは読まない。簡潔に言ってしまえば苦手なのだ。
だが、この日はそんな苦手なものを読んでしまった。「怖いもの見たさ」というやつだと思う。僕は、幾つかの話の中から一編だけを直感で選び、読むことにした。

夜。学校から帰宅する為、少女は一人で歩いていた。
ふと背後に何かの気配を感じ、少女は振り返る。
だが其処には誰もいない。
「きっと気のせいだ」そう思い、少女はまた歩き出す。が、暫くするとまた気配を感じる。
少女は少し怖くなってきたが、ゆっくりと振り返る……誰もいない。
少女の恐怖は徐々に増していき、少しでも早く家へ帰ろうと走り出す。
だが其のうちに、少女は違和感に気付くこととなる。
少女の通る道には、人も動物も全く居ない。周りの家々からも全く気配が感じられない。自分の足音以外、物音一つ聞こえない。
少女は家まで後少しという所で立ち止まった。
「このままでは家に何かが来てしまう」直感的にそう思ったのだ。
少女は勇気を振り絞り再度振り返った。
だが、やはり其処には誰も居ない。でも何かが変だ。
電灯が消えているのか、今まで通った道は少女の少し手前まで真っ暗になっていた。
そして其の真っ暗な闇はどんどんと近づいてくる。
少女は恐怖を感じていた。

其れは、迫り来る闇に対してのものだけではない。
少女は其の闇の中で何かが蠢いている事に気付いていたのだ。
恐怖に動きを止めていた少女はふと我に返り、すぐさま逃げようとした。だが、少女の影が闇に触れた途端、少女の体は金縛りにあったかの様に動かなくなってしまった。
迫る闇を見詰めながら少女は悟った。
あの蠢いているもの、あれは闇の中に居るのではない。闇自体が蠢き、こちらへ向ってきているのだと。
闇と少女の距離が近づくにつれ、闇からは手の様な、触手の様なものが次々に伸び、其れ等は少女を抱く様に力強く包んでいく。
闇が半歩ほど手前に迄到った時、闇は大きな口を開けた。
そして其のまま、ゆっくりと少女を飲み込んでいった……。
闇が去った後、其処には誰も居なかった。

という内容だ。
怪談話しではありがちな話にも思えた。だが、其の「怪談」というもの自体を苦手とする僕には、薄暗い学校の中、独りで読むという行為自体に少々無理があった様だ。背筋を這う悪寒はなかなかに取れる事が無かった。
僕は、帰り道に些かの恐怖を抱きながらも、そそくさと支度を整え家路についた。

＊

帰り道、僕は出来るだけ人が居る道を選びながら進んだ。人が通り過ぎると次の人を探して小走りをし、人が現れると落ち着いてゆっくりと歩いた。
だが、どんなに気を配ろうとも、どうしても人気の無い場所とい

うのはあるものだ。
商店街を横に伸びる細く入り組んだ道も其れだ。此処はこの街の中でも最も人通りが少ないと言ってもいい。
曲がり角が多く、誰かが潜んでいても解らないうえに、電灯の一部は切れかけて点滅している。よく痴漢やひったくり等の事件が起こるわりに整備も不十分で、暗くなってからのこの道には大人もなかなか通ろうとはしない。
僕は、人が居るという事を重視するあまり、何時もとは違う道を通ってしまった。其の為に、この道を通らなければ僕の家には辿り着く事は出来ない。だからといって、引き返そうにも来た道を振り返れば人は既に疎らになっていた。
僕は腹をくくり、息を止め、何も見えない様に目を瞑り、下を向いたまま走り抜けようとした。
何時もとは違う道とはいえ、此処は住み慣れた街。目を瞑っていても道はなんとなくは分かる筈だ。
僕は走り出し、最初の曲がり角までは上手くいった。だが、其処を曲がった所で直ぐ誰かにぶつかってしまった。
「すみません！！」
咄嗟に謝りながら僕が目を開けると、男性が目の前で尻餅をついていた。
暗がりでよく顔が見えないが、足元に狐面が落ちている。どうやら夏目さんにぶつかってしまった様だ。
「あの、すみません。大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫。あはは、びっくりしたなぁ」
そう言って立ち上がった夏目さんの顔を見て、僕は自分の目を疑った。そして次の瞬間、僕は全速力で走り出していた。
夏目さんは、この街に来てから一度も人前で面を取ったことは無かった。
当然、今迄にも、周りの人間が幾度となく其の事に触れたのだが、其の度に夏目さんは何とも悲し気な雰囲気を醸し出すので、何時し

か其れは夏目さんへの禁句となっていた。
面を取れないのも当然な事だ。夏目さんには顔が無かった。
顔の輪郭の内側に円く穴が開いていて、其の中は真っ暗な闇が渦巻いていた。
急に走り出した僕の反応を見て、夏目さんは直ぐに自分の面が取れている事に気付いたのだろう。
「あ！ちょっと待って！！君に……」
遠く後方から夏目さんの切羽詰った声が聞こえたが、急に吹いた向かい風で声はかき消された。
僕はそのまま走って家に帰り、鍵を閉めた。
僕の体は震えていた。

＊

あの日から三日が経った。僕はあれから一度も家を出られないでいた。
信じてもらえる訳が無い。其れが解っているから、あの日の事は誰にも話してはいない。
家族には不審がられ、学校から何度も電話があったが、「外に出たら夏目さんに襲われる」
そんな気がして、どうしても家を出る事が出来なかった。
だが、僕には一つ気になっている事があった。
夏目さんの最後の言葉。
「君に……」
君に何なのだろう？
僕は家に籠っている間、色々と其れらしい答えを考えた。
「君に……」
其の後に続く言葉は、完璧な答えはもとより、可能性のありそう

な言葉すら出て来はしなかった。
僕の頭の中は何時しか、其の事ばかりが渦巻く様になっていた。
そして、どうしても其の答えが気になった僕は、意を決した。恐怖を堪えて外に出る。其の答えに行き着いたのだ。
夏目さんに直接訊かなければ、この謎は解けはしないのであろう。
だが、さすがに二人きりで会うのは怖い。
人気のある場所で夏目さんを捕まえ、こっそりと問いただそう。人前でなら夏目さんもそうそう手は出せまい。
が、今は深夜。他の人は勿論のこと、肝心の夏目さんも外に出てはいないであろう時間だ。そして何より、もしも夏目さんが居たとして、暗闇の中で夏目さんに会うのはやはり怖い。
よって決行は朝と決めた。
其の為に先ずは外の様子を窺おう。未だ日の昇らぬ午前四時、あの日から閉ざしたままの自分の部屋のカーテンを少しだけ開けた。
恐る恐る外を見回す。……大丈夫そうだ。
そう思い、カーテンを閉めようとした瞬間、僕は見てしまった。
僕の家の真ん前に立ち、二階にある僕の部屋をじっと見詰める夏目さんの姿を。
狐面越しではあったが、目が合ってしまった。そう感じた。
僕は勢いよくカーテンを閉め、その場にへたりこんだ。
「見付かった……」

＊

僕はベッドに潜り込み、ただただ震えていた。
「もう逃げられない……」
だが、僕の心には其の特大の恐怖と同時に、自分に対しての一つの問いがひょっこりと顔を出していた。

自分は本当にこのまま震えているだけでいいのだろうか？
このままでは只襲われて僕の人生は御仕舞いだ。
十六年、何とも短い人生だ。思えば何も特出する所の無い人生であった。
初恋は想いを告げられぬままに終わり、必死で打ち込んだものも此れといって無い。
其れは、とても淋しい事に感じられた。そう思うと、怒りの様な、はたまたやる気の様な、何ともいえぬ感情が自分の中で湧き上がってくるのを感じた。
どうせ死ぬのであれば、せめて一矢報いて死んでやろう。もしかしたら何かしらの光明が見え、運良く逃げられるかもしれない。そうしたら今度はもっとマシな人生を送れる様に努力をしよう。友人の誘いにも進んで乗ってみよう。もっと劇的な展開が待っているかもしれない。少なくとも死ぬ前に後悔しない様に……。
もし逃げられなかったとしても、今のまま死んで逝くよりも、ほんの少しは納得が出来る。そんな気がした。
僕は奮起し、勢い良く、そして鼻息荒く布団から頭を出した。
心の中で「よし！」と腹をくくり、起き上がるため仰向けに寝返った。
そして僕はそうした事を後悔した。
僕の眼前数センチ、今にも触れそうな距離に、僕の事をじっと見下ろしている夏目さんの顔があったからだ。彼の身体は不思議な事にふわりと宙に浮いている。
「やあ、こんばんは。いや……もう、おはよう。かな？」
僕は気を失いそうになった。が、なんとか持ちこたえた。
僕は、気を取り直しつつ恐る恐る夏目さんに尋ねてみた。
「何故此処に……家の中に……」
夏目さんは、何時も通りの優しい口調で答える。
「化け物。君は僕をそう思っているんだろう？なら其れで理由付けとしては十分なんじゃないかな？」

其の夏目さんの言い回しに、僕は違和感を覚えた。
「そう思っているんだろう？って、……そうじゃないってことですか？」
そう問い掛ける僕に、夏目さんはクスクスと笑い、其の問いにゆっくりと答える。
「其処に引っ掛かった人は初めてだ。面白い。まあ、化け物といえば化け物さ。そして人間といえば人間だ。結局はその人がどう捉えるかの問題だからね。でも、少なくとも僕自身は人間の積もりだよ。人を食べたりもしないしね」
言い終えると、夏目さんはまたクスクス笑った。
笑ったかと思えば、夏目さんは急に真面目な口調で訳の分からない事を口にした。
「君はマーキングされたんだ」
僕の頭には？マークが浮かんだ。
「君は最近、何か闇に関する事を知ったんじゃないかな？」
「闇？」
「そう。闇だ。どんな形でも何か闇に関わる事を。恐らくは僕とぶつかったあの日に」
どういう意味かは解らなかった。だが、僕には一つ思い当たるものがあった。
「怪談。……あの日、夏目さんとぶつかった日に図書室で読んだんだ。闇に捕らわれて、喰われて消える話を……」
「其れだ！」
夏目さんはそう呟くと、ベッドからひらりと舞い上がり、くるりと回りながら部屋の中央にふわりと正座で着地をした。そして、僕をしっかりと見据えながら恐ろしい言葉を発した。
「このままいけば、君は次の新月の晩に闇に喰われて消えることになる」
夏目さんの狐面がニヤリとして見えた。

＊

僕は学校から家へと歩いていた。
もうとっくに日は落ち、辺りは真っ暗だ。
何時もの通いなれた道に見慣れた景色。
だが、何か嫌な感じがする。僕の後ろに何か居る。そんな気がする。
僕は立ち止まり、勢いをつけて振り返ってみる。……誰も居ない。
気のせいかと思い、僕はまた歩き出す。
暫くするとまた気配を感じた。
僕はまた、恐る恐る振り返った。……やはり何も居ない。
だが、何か変だ。
辺りに人や動物の気配は全く無く、僕がさっきまで普通に歩いてきた道の街灯が、数メートル離れた所まで消えている。
そして其れは徐々に近づいてくる。
「ヤバイ……」
そう思い、逃げようとした瞬間、闇は僕の影に触れ、其れと同時に僕は身動きが取れなくなった。
闇はどんどん迫ってくる。
闇が近づくにつれて闇の中で何かが蠢いているのが見えた。
僕の恐怖は闇が迫る事に比例して大きくなっていった。
闇からは手のような触手のようなものが伸び、僕を包んでいく。
そして、闇が半歩ほど手前まで迫った時、闇は大きく口を開いた。
「喰われる……」
そう思った。其の時、僕は目を覚ました。
体には嫌な汗がまとわりついている。
闇に襲われていたのは只の夢だったのだ。

あの日、夏目さんは僕に助かる方法として三つの事をするように言った。
先ず一つ目は、あの日に読んだ本を学校から盗み出し、あの怪談を毎晩読むこと。
本を盗む事には抵抗があったが、夏目さんは「盗むのは他の被害者を出さない様にする為だ」と言った。
もしも夏目さんが言う事が正しければ、確かに他の誰かの目に万が一にも入らないようにする必要がある。
僕は夜のうちに学校へ忍び込み、本を盗んだ。
勿論、夏目さんを完全に信用した訳ではなかった。だが、夏目さんの顔等の不可思議なものを目にした僕には、其れが嘘とは言い切れなかった。
そして何より、現段階では其れが真実にせよ偽りにせよ、従う他に僕に道は無かった。
二つ目は、国語辞典を毎日読むこと。
読む事自体に抵抗は無かったが、此れには何の意味があるのか皆目解らなかった。
そして三つ目、其れは、毎日夏目さんと会うことだった。

＊

夏目さんの家は街外れの小高い丘に建つ古くて大きな洋館だ。
夏目さんが街に来るまでは怪現象が度々目撃されていた場所だったのだが、夏目さんが越してきてからはそんな噂もいつしか聞かなくなった。
僕は毎日其の洋館へ足を運ぶこととなった。

「夏目さん。来ましたよ！」

矢鱈と重い扉を開きながら、僕は大きな声で夏目さんを呼んだ。
其れにしても凄い家だ。ドラマや映画に出てきても何の違和感も無いであろう広く立派な洋館。
中には、高そうな、でも嫌味を全く感じさせないソファーやテーブル等の家具が置かれ、其の上には数え切れない程の本が其れこそ山の様に積み重なっている。
僕が部屋を見渡しているうちに、二階から夏目さんが降りてきた。
夏目さんはスーツ姿だったが、何時も見る3ピースのスーツ姿ではなかった。と言ってもジャケットを脱いでいるだけなのだが、袖にガーターも付けずに夏目さんの体にぴったりとフィットしている其のシャツは、オーダーメイドであることを窺わせる。
「いらっしゃい。……で、持ってきた？」
「本なら此処に」
僕は鞄からあの怪談の本を取り出し、目の前の机にそっと置いた。
「この本か……で、お土産は？」
夏目さんは首を傾げ、まるで餌をねだる子犬の様に此方を見詰めている。
僕は呆れながら返した。
「何故、土産がある前提なんですか……」
其れに対して夏目さんは胸を張って答える。
「人に助けてもらうんだ、土産くらいあってもいいだろう？」
夏目さんは何故だか楽しげだ。……負けた。
「……今度、持ってきます」
「楽しみにしているよ。あ、ロールケーキが良いな」
引きつった顔の僕を無視して、夏目さんは子供の様にはしゃいでいた。
だが、僕にはそんな余裕は無い。このままでは僕は闇に喰われて消える……かもしれないのだから。
それに、僕には未だ気になっている事が幾つかあった。
「夏目さん。御訊きしたい事があるんですが。……彼方の顔の穴は、

一体何なんですか？」
唐突に切り出した僕の質問に、夏目さんは至って自然に答えた。
「何って、穴だよ」
「いや、其れは見れば分かります。僕が訊きたいのは、其れはどういうものなのか、そもそも何で顔にそんなデカイ穴が開いているのかという事です」
必死な形相の僕の問い掛けに、真剣に話す気になったのだろうか、夏目さんはふっと息を一つ吐くと、階段にゆっくり腰を下ろした。そして此方を見詰め、何時も以上に真剣な声で話し始めた。
「此れは昔、奪われたんだよ。君が此れから対峙する闇にね」
少し驚いた。だが、僕がマーキングされたと夏目さんが気付いた理由が解った気がした。
僕は質問を続けた。
「詰まりは、あの時の僕に、其の時の夏目さんと共通する何かがあったという事ですか？だから闇にマーキングされた事に気付いたと？」
夏目さんは首を振る。
「いや、そうじゃない。この穴が君が闇に触れた事を教えてくれたんだ」
「どういうことですか？」
夏目さんは、少し迷ったように言葉に詰まったが、ゆっくりと語り始めた。
「この狐面はぶつかった程度の衝撃で落ちるものではない。紐も何も付いていない。其れなのにずっと顔に張り付いている。この面は穴に引き寄せられているんだ。」
「其の穴に引力の様なものがあるということですか？」
夏目さんは頷く。
「僕はあの闇に顔を奪われた。でも、眼も鼻も口も無くなった筈なのに、普通に見えるし、普通に呼吸も出来るし、普通に嗅げるし、普通に話せる。味覚もある。其の理由は僕にも解らない。けど、一

つ解っているのは、この穴にもあの闇の能力が少しばかり備わっているっていう事だ」
そう言うと夏目さんは立ち上がり、そっと面を外した。
其れと同時に夏目さんへ向けて強い風が吹いた。人が飛ばされる程のものではないが、部屋にあった本や置物が夏目さんの穴をめがけて飛んでいく。
其れ等が穴に触れそうになった瞬間、夏目さんはさっと面を着け、向ってくる物達をひょいと軽くかわした。
後ろで騒がしく壁にぶつかる置物達を気にも留めず、夏目さんは軽く体に付いた埃を掃いながら続けた。
「こういう事だ。この面は穴より大きくて顔の輪郭に引っかかる。しかも其の上に軽い法力を入れてもある。だから、あの強い引力にも負けずにずっと僕の顔に張り付いている。だから、普通ならあの程度の衝撃で外れる事は無いんだ。あの時はおそらく、君が闇に接触していたことによって、君に付いた闇の痕跡と穴の闇とが共鳴し合って一時的に引力に揺らぎが生じたんだろう。色々考えたが、其れが一番可能性が高いと思ったんだ」
僕は何となくにではあったが納得がいった。
「質問は以上かな？」夏目さんはコホンと咳払いをして、まるで教師の様な口調で言った。
「いえ、未だあります。夏目さんが言った助かる為の三つの事について」「其れは秘密だ」
僕の言葉を遮る様にして夏目さんは僕に背を向けた。
「もう帰りなよ。陽も落ちる。親御さんも心配するだろう？」
そう言うと夏目さんは回れ右をして、スタスタと二階へと上がっていった。
僕はしぶしぶ洋館を後にした。

＊

あれから数日、僕は夏目さんの言う通りに行動した。
毎日、怪談と辞書を読み、夏目さんの家に出かけた。
そして日は巡り、新月の日となった。
結局、夏目さんから「三つの事」の意味を聞き出す事は出来なかった。僕に教えずして何の意味があるというのか……。
僕は念の為、学校から何時もよりも早く帰ることにした。
未だ陽が暮れるには時間がある。警戒しながら、そして急ぎながら歩いた。だが、結局、何事も無く家に着いてしまった。
無事な事に越したことは無いのだが、何だか拍子抜けだ。
陽があるうちに帰ったのが良かったのか、それとも夏目さんの話が嘘だったのか・・・。
兎に角、此れで僕は自由の身だ。
僕はすっかり安心しきっていた。

＊

気が付くと、僕は夜道を歩いていた。
通い慣れた道、学校からの帰り道だ。
僕は、何気無く後ろを振り向いた。其処には誰も居ない。
僕は再び歩き出す。
暫くすると、僕の背筋に悪寒が走った。後ろから何か殺気の様なものを感じた気がした。
恐る恐る振り返るが、其処にはやはり誰も居ない。
だが、変だ。
今まで通ってきた道の街灯が全て消えている。其の先は、何も見えない真っ暗な闇。其処に何があるのか、何が居るのか、ぼんやり

とさえ見えはしない。
そして、其の闇は少しずつ此方へ近づいてくる。
其処で僕は、やっとあの本の事を思い出した。
「ヤバイ！」
僕は急いで走り出そうとしたが、時既に遅く、振り返る間も無く僕の影は闇に触れ、動きを封じられてしまった。
闇が迫ってくる様子を見詰めながら、僕は必死に考えていた。
確かに、僕は家に帰った筈だ。其れなのに何故こんな事になったのであろうか？
必死に行った「三つの事」も、やる意味も使い方も解らない以上は、利用のしようが無い。
闇は既に、僕まで残り二歩程という所まで来てしまっている。「もう駄目だ」と、諦めの言葉が頭に溢れ出る。
「喰われる……」
僕は恐怖に目を閉じた。

「影踏んだっ！」
瞼の向こう、夏目さんの声が聞こえた気がした。其れと同時に、僕は金縛りから解き放たれた。
一寸よろめきながら、そっと目を開くと、目の前には、面を左手に持って闇の前に立ちはだかる夏目さんの姿があった。
驚く僕をよそに、夏目さんは、僕の手を引いて僕の家へと走り出した。
「し～り～と～りっ！！」
夏目さんは僕に続きを促す様に強い口調で言った。
状況が読めぬまま、僕はつられる様に続けた。
「り……り～ん～ごっ」
「ご～まっ」
「ま～りっ」
「り～ん～ど～うっ」

「う～どっ」
「ど～う～ぶ～つっ」
「つ……つの！」
「の～りっ」
「り……立位体前屈っ」
「つ～りっ」
「……陸橋！」
「う～りっ」
「り、陸！」
「く～りっ」
「り～かっ」
「か～りっ」
何故夏目さんが此処に居るのか、何故しりとりなのか、そして何故り攻めをされているのか・・・。
僕には何が何だかさっぱり解らなかった。だが、振り返ってみらば、闇は追ってきてはいるが、まるで何かに進行を阻害されているかの様に動きが少し鈍くなっている様に見えた。

り攻めに必死に耐えながら、僕達はやっとの事で家に到着し、急いで中に入った。
「り……り……リストラ！」
僕はり攻め地獄にクラクラしていた。
「ん？何時までやってんの？」
クラクラな僕に、夏目さんはいきなり何時もの様な飄々とした口調で話しだした。
急な変化に対応し損ねている僕を無視して、夏目さんはいきなり僕の左頬に強烈なビンタをくらわせた。
「痛っ！！」
其の痛みと共に僕は目を覚ました。
「夢？」

そう思い、安堵したのも束の間、僕の目の前には右手を痛そうにぷらぷらと振っている夏目さんが立っていた。
「……今のは、夢なんじゃ……」
夏目さんは、未だ右手をぷらぷらしながらも此方を向き、真剣な口調で答える。
「夢だよ。君は夢の中で喰われて消えかけたんだ」

＊

「お化け（おばけ）、妖怪（ようかい）、怪（あやかし）、怪異（かいい）、時には神（かみ）や悪魔。呼び名も分類も、害のあるもの無いもの、神聖なもの穢れたものと、色々あるけど、もの凄〜く大まかに言ってしまえば、略同じだと言える」
夏目さんは僕にそう言った。此処では取り敢えず怪異としておこう。
其れ等は、百年以上生きて妖力や魔力を得た物や動物、自然現象や説明の出来ない事柄の理由付けとして人から名前を付けられ力を得たもの、子供等に言い聞かせる為に作られた架空の生き物等、発祥は様々だ。
初めは作り話や無理矢理な理由付けだったとしても、言葉にすることで、言霊の力によって其れは現実となる。まぁ、全てという訳ではないのだが。
言霊の力については物理学的に証明出来るらしいが、其の説明は今のところ物置の片隅にでも置いておくことにしよう。
さて今回、僕にマーキングしたのは人間の闇に対する畏怖の念と、其処から派生した作り話から生まれたものであろうと夏目さんは言った。
あの闇は実体を持っている訳ではなく、人の想像力を利用して人の記憶に住み着き、夢の中で襲うことにより魂を喰らう。

魂を喰われれば、其の個人の存在は消えてしまう。身体が残っていたとしても、特殊な能力を持った者以外には、其れも見えなくなってしまう。

一度消えてしまったら、あの世にも逝けず、輪廻の輪にも戻る事は出来ない。

しかし、闇が魂を喰らうには二つの条件があるそうだ。

一つ目は、住み着ける対象は闇という怪異の存在を初めて知った人間である事。

印象というものは時と共に薄れていくものだ。印象が薄れる事で、想像する力も弱くなり、闇の存在自体も力を無くしていくからだ。

二つ目は、其れを知ったのが怪異等の妖力や魔力が高まる満月の日である事。

タイミングの問題の様にも思われるが、夏目さん曰く、闇に住み着かれる様な人間とは、元々、闇に引き寄せられてしまうものなのだそうだ。

闇は満月の日に勝手に溢れ出る自身の力に引き寄せられた人間に住み着き、新月によって力の弱まった日に、宿主の想像力を利用し、最小限の力で魂を喰らう。襲われる側からすれば、何とも憎たらしい話である。

兎に角、僕は其の二つの条件を満たし、また、闇を引き寄せる体質だったという事らしい。

更に、闇には住み着いてからも条件があり、住み着いた人間の記憶に沿ってしか行動する事が出来ない。

僕の場合は、怪談の内容がそうだった為に「帰り道に襲われる」という条件付けがされていた。詰まり、一度夢の中で家の中へ逃げ切ってしまえば、もう一生襲われる事は無いということだ。

そして、夏目さんが僕に言った助かる為にする三つの事。

一つ目の「怪談を毎日読む」というのは、自分の中で物語の世界をより明確に感じる為だったのだそうだ。

夢の中で走りたいのに速く走れないという経験はないだろうか？

繰返し読んで、頭の中で物語の世界を明確なものにすることで、そういった事も起き難くなり、夢の中での自分に自由が利くようになるのだそうだ。

二つ目の「辞書を読む」は、しりとりに詰まらない様にする為だったらしい。

夏目さん曰く、しりとりというのは古い護法で、結界を張る力があるのだという。

結界といっても、其の力はとても弱く、ほんの一瞬しか足止めすることは出来ない。普通の人間が一人でやったところで、簡単にすり抜けられるそうだ。

だが、人数を増やしたり、妖力や魔力、神力、法力等の特殊な力が強い者と一緒に行ったりすれば、結界の威力が増すという。

闇に支配された夢の中では、闇の力が強まる。

闇の力を持つ夏目さんもまた力が増し、二人という少人数でも、目で見て分る程に闇の進行を阻害する事が出来たのだ。

因みに、しりとりと同じ様に、僕を金縛りから解いた影踏みも影の中の魔を祓う護法らしい。今回の事にはうってつけという事だ。

そして三つ目の夏目さんに毎日会うというのには、夢の中に夏目さんを登場させ易くする意味があった。

夏目さんの穴にも闇と同じく、人の意識に進入するという能力が備わっている。其れを利用して夏目さんは僕の夢に登場したのだ。僕のイメージを利用して入って来るのだから毎日顔を合わせていれば意識内により入り易くなるのだ。

因みに、闇のことを告げられた日、夏目さんが僕の部屋へ入ってこられたのは、夏目さんが本当に僕の部屋に不法侵入していた訳ではない。僕が夏目さんと目が合ったと感じた瞬間に、僕の意識に夏目さんが侵入し僕の意識の中で会話を交わしていたらしい。

だから、僕には見えていても他の人間には見える事は無い。

誰も居ない部屋で独り、見えない誰かと話している姿は、傍から見ればどれほど不気味な光景であっただろう……。

最後に、何故其れ等を僕に告げなかったのかという疑問が残るが……。

「サプライズがあった方が面白いからね～」

と、何時も通り飄々と答える夏目さんに、僕はアハハとかわいた笑いで返した。

「でも、夏目さんが夢の中に入れるなら、夏目さんの穴で闇を吸ってしまえば良かったんじゃないですか？後は、寝るのを我慢するとかで防げたんじゃ……」

僕の問いに夏目さんは少し間を置いて答えた。

「先ず、寝るのを我慢する事は出来ない。新月の晩には怪異の力は弱まる。でも、其れまでに闇は君の中に定着してしまっているんだ。定着さえすれば自然と夢の中に引き込まれてしまう。其れには抗い様が無いんだよ。そして、僕の顔の穴の力は、闇の力のほんの少しが備わっているにすぎない。君の夢の中とはいえ、本体と一部分に過ぎない僕。力の差があり過ぎる。だからといって他の手を使おうにも、闇は実体が無いから、実際には僕達に退治する方法は無いんだよ。もし出来るとすれば、人から想像力が無くなった時くらいだろうね」

そう言った夏目さんの声には何処か悔しさが滲んで感じられた。

## 鬼の手（壱）

僕は人付き合いが苦手だ。

だが下手な訳ではない。昔から自然と人間観察をしていたせいか、どんな時にどんな言葉をどんな風に返せばいいのかは理解していた。だから自分の意思もそれなりに通しながら、クラスで浮かないという適度な立ち位置を取ることが出来ている。

だが、そういう事柄が不得意な人間もまた居るものだ。僕と同じクラスにも一人、浮きすぎて宙を舞ってしまっている男が居る。

彼の名は敷島公（しきしまこう）という。

敷島は、この辺りでは有名な寺の跡取り息子で、成績はどの教科も何時も上位の完璧人間。何時も窓際の一番後ろの席で外をじっと見詰めている無口な奴だ。彼は端整な顔立ちに涼やかな目をしている。いや、涼やか過ぎる目をしている。

其の目はまるで、こちら側の総てを見透かした様で、周りの人間は其れを怖がり、誰もが話しかけることを躊躇してしまっていた。

其れだけであれば、時が経てば解決出来たのかもしれない。

だが、一学期の始め頃、敷島が完全に浮いてしまう決定的な出来事が起きた。

授業中、皆が前方の黒板に書かれた数式を必死にノートに書き写している時の事。ガタンという大きな音と共に、一番後ろの席にいた敷島が勢いよく立ち上がった。

何事かと振り向いた者は、皆一同に固まっている。敷島は涙を流していたのだ。誰もが泣いている理由が解らない。ざわつく教室。

そんな状況を尻目に、敷島はそそくさと荷物を纏め、早退すると先生に告げた。理由を問う先生に対して彼は「たった今、祖父が死にました」と言い放った。

其れを聞いた先生は「軽々しくそんな嘘をつくな！」と激怒し、

敷島の胸倉を掴んだ。
寺の息子とはいえ、いきなりそんなことを言われても、信じることはなかなかに難しい話だ。だが、急に泣きだした生徒を相手に、其れだけで直ぐに怒るのも余りに短慮が過ぎる。
皆があっけにとられて他に止める人間もいない。仕方なく僕が間に入って二人をなだめる役目となった。
「ストップ！先生、落ち着いて下さい。敷島も急にどうしたんだ？」
僕の問いに敷島は答えず、黙って席に戻った。先生はまだ苛立っていた。
次の日、敷島のお祖父さんが本当に其の時間に死んでいた事を知り、クラスは凍りついた。
あの日以来、敷島の声を聞くことは無くなった。きっと周りの人間に失望したのだろう。
そして、今迄少ないながらも気を遣って敷島に話しかけていた人間達も全く居なくなった。唯でさえ話しかけ辛い敷島に、皆、何と言えば良いのか分からず、それ以上に祖父の死を言い当てた彼を皆完全に怖がってしまったのだ。そんな状態が外に洩れない訳も無く、その噂は瞬く間に広まり、数日後には敷島は、学校全体で浮く事になってしまった。
僕も周りから浮かないように、悪いと思いながらも話しかける事をしなかった。
そんな敷島の声を久々に聞いたのは、季節が夏から秋へと変わり始めた9月の事だった。

＊

僕は闇の一件があって以来ほぼ毎日、夏目さんの家へ遊びに行っていた。

夏目さんの家に居ると何故だか落ち着く。夏目さんの家は、夏目さんが集めた世界の色々な本が山積みになってある。本好きの僕としては、其れもまた落ち着く理由の一つなのだろう。
夏目さんもまた、僕が行く度に「また来たのかい？」と呆れた様な台詞を毎回の様に言いながら、其の度にそっと僕に紅茶を淹れてくれる。僕等は毎日何気ない世間話をしたり、それぞれに本を熟読したりして過ごしていた。
そんなある日、僕は風邪をひいて3日程学校を休み、夏目さんの家にも行く事が出来なかった。やっと熱も下がり学校へ行ってみると、教室の雰囲気が何時もと違うことに気付いた。訊けば、僕と同じ日から敷島も学校を休んでいるという事だった。何時も、独特の空気で教室の後ろにいる敷島が居ないと、其れは其れで変な感じがするものである。
未だ残る暑さという夏の影も、涼やかな風にかき消され始めたこの頃、僕と同じように風邪でもひいたのだろう。
僕もクラスメイトも誰もがそう思っていた。

＊

学校が終わり、僕は数日振りに夏目さんの家へと向った。
途中、商店街のケーキ屋で夏目さんお気に入りのロールケーキを買った。生地は米粉を使い、ふわふわでありながらべちゃりとはせず、卵が多めで濃厚だが、白餡が入ったとても軽く口溶けのいいクリームのおかげで重たくなく食べられる。夏目さんだけでなく、僕自身も大好きな逸品だ。
僕はケーキを揺らさない様にゆっくりと歩を進めた。
夏目さんの家の前に着くと、ここでもまた何か何時もとは違う雰囲気を感じた。何やら空気が重たい気がする。

数日あけたからか？などと思いながら僕は重い扉を開けた。
「こんにちは～・・・あれ？」
扉を開けた僕の目には夏目さんの姿ではなく、意外な人物の姿が映っていた。
「橘・・・、なんで此処に？」
そう言ったのは、数日学校を休んでいる敷島だった。
お互いに急な事で言葉が出ない中、夏目さんが二階から降りてきた。
「おや、橘君、風邪はもういいのかい？」
先程からの数秒間流れていた微妙な空気をものともしない自然な問いに、僕は一気に力が抜けた。
「あ・・・、はい。もう完全に治りましたよ」
「風邪は万病の元だから、甘く見ないほうがいいよ～」
先ほどの沈黙が無かった事の様な僕と夏目さんの自然な会話に、敷島は置いてきぼりの様子だ。其れを察してか、夏目さんは敷島にも話題を振った。
「そうそう敷島君。橘君とは同じ学年だったよね？」
置いてきぼりから会話に参加するのに一瞬詰まりながら敷島は答えた。
「あっ、はい。・・・というか、同じクラスです。」
「そうなんだ～。で、２人は仲いいの？」
夏目さんの軽いトーンの問い掛けに、僕と敷島は顔を見合わせ、同時に答えた。
「いいえ。」
其の答えに夏目さんはクスクスと笑った。
「其の割には息が合っているね。」
僕等はまた顔を見合わせた。

## 鬼の手（弐）

敷島の家は古くからこの地に在る寺だ。寺自体は平安の頃から在るらしいが、敷島家は戦国時代に住職も無く廃寺同然だった其の寺を引き継ぎ、今日まで続けてきたそうだ。敷島は其処の跡取り息子ということになる。

元々、敷島家の先祖は全国を修行して旅していた僧だったらしい。其れが、たまたま通りかかった現在この街がある場所で宿を借りた際、宿の主人から相談を持ちかけられた。

「身の丈五十尺以上もある馬鹿でかい鬼がこの辺りを暴れまわって困っている」と。

元来、真面目と正義感で出来ているといってもよい、よく言えば善人、悪く言えばバカ正直な人間だった敷島の先祖、敷島宗院（しきしまそういん）は、無謀な事と解りつつも鬼を倒す事を快く引き受けたのだそうだ。

無謀と言うのも、其の鬼は既に人間、妖の見境無く、大量に喰らっているらしく、喰われた人間の名前の中には、宗院も知っているとても高名で強い力を持った霊能力者や術士達も入っていた。

そんな者達がいとも簡単に鬼の胃袋に納まったという話だ。それだけで鬼の力の程が窺える。

対して宗院の力はさほど強い訳ではない。人一倍厳しい修行にも耐えた宗院の力は、一般的な僧侶よりはやや強くはあるが、喰われたという者達に比べたら天と地程の差があるのだ。鬼との力の差は見るまでも無い。普通に考えれば勝ち目など全く無いと言っても良い。

だが、宗院には一つ奥の手があった。

宗院は長い修行の旅の中、とある術を会得していた。

其れは、諸刃の剣ともいえる術。自分の一部と引き換えに一時的に神仏に近い力を得られる術だった。

今迄にこの術を使った者は、ある者は両腕を失い、ある者は視力

と言葉を失い、またある者は心の臓を失った。
何を失うかは使ってみなければ分からないが、無傷で済むことはまず無い術である。
其れを使う事を考えたうえで快諾したのだから、宗院とはまったく、ある意味凄い。何とも天晴れな人間である。
だが、其の術を使ったとしても、まだ足りない。
術により力が増すのはほんの一時。細かな持続時間も分からないうえに、其の間に完全に倒せる保証は無い。
もし完全に倒すことが出来なければ、鬼は勢いを増して暴れまわり、少なくともこの辺りはものの数分で跡形も無く破壊され、ただの荒野となる事だろう。万が一にも失敗は許されない。
そこで宗院は、鬼を倒すのではなく、封印する事にした。
封印する事は、倒す事に比べればかなり容易ではある。
ただ、鬼の力から考えて、物への封印は難しい。
法力にしても闇の力にしても、力というものには波がある。其の波によって力の強弱や安定性が決まってくる。
通常、物に封印する場合には、法力等を吹き込んだ物質や、もともと力が宿っている物に対象を封印し、其の上からまた力をかける。其のまた上に御札や注連縄をし、其れが封印した物に込めた力を循環させ、波を生み、安定した封印が出来る。
だが、其れには時間が掛かる。其の間、鬼がおとなしくしているとは思えない。恐らくそんな事をしている間に其の周辺に居る人間は全員、鬼の食料となるだろう。
となれば、元から力の循環のある人間に入れる他は無い。そしてこの場にいて、力を持ち、鬼を入れる器となりえる者、そんな人材は一人しかいない。
宗院は迷い無く自分を封印の器とする事を決めた。
宗院は、早速この集落の鍛冶屋を呼び、特別な焼印を作らせた。
先にも述べたように、人間等の生き物には元から幾重にも力が循環している。よって後から強制的に波を起こす必要が無く、其の点

で封印の時間は短縮出来る。だが、其の波はとても不安定なものである。
もし鬼が内部から力の循環の薄い部分を突いてきた場合、また、自らの力が弱まった場合、自分の体を突き破り鬼が出てきてしまうかもしれない。
其れを防ぐ為には蓋をしなければならない。其の役目を果たすのが焼印なのである。
時間がある場合には、刺青等を入れる等で印を刻み、其れを蓋とする。
だが今回の場合には、そんな余裕は無い。体内に封印した次の瞬間には蓋をしなければならないのだ。
そんなに早く、そして消えないという「蓋」をするには、印を焼き入れるのが一番手っ取り早いのである。
翌日、鍛冶屋が仕上げた焼印に宗院が自分の法力を入れ、其れは完成した。
其の夜、宗院はこの地に住む二人の勇士と共に深い闇が支配する森へと足を踏み入れた。

## 鬼の手（参）

宗院達が森に入って丸一日が経とうとしていた。
取り敢えず、三日分の食料は用意してきたが、本当は其の日の内に鬼と出会う積もりだったのだが・・・と思いながら、宗院はずっと絶え間無く焚き続ける火を見詰めていた。
宿の主曰く、鬼は毎晩暴れまわっているという話だったのだが、今のところ姿どころか気配すらも感じない。
何かがおかしい。宗院の頭には違和感がずっと居座っていた。其れは最初に宿の主から鬼の話を聞いた時からのものだ。
話しから推測する鬼の力からすれば、然程大きくもなく、敵となる力の強い者も居ないこの様な集落は、もうとっくに滅んでいておかしくはない。それなのに、弱りながらも集落はまだちゃんと残っている。そして何故か鬼はこの周辺にずっと居座っている。
今出ている被害といえば、近くにあったこの集落の水源を汚されて使えなくされた事、宗院が集落にやってくるのに通った道以外、集落と外界とを繋ぐ交通路を全て破壊された事、其の道を通ろうとした集落の人間を襲って其の内数人が喰われた事、そして宿の主の話にあった鬼の討伐に向った者達が尽く喰われた事。
それらの状況から見て、鬼は単に暴れているだけとは思えない。
何か鬼には思惑がありそうだ。まるでこの集落を生殺しにして、じわじわと苦しませて楽しんでいる様にも見える。
鬼がこの集落に執着する訳・・・怨みか。
となれば集落の人間なら事情を少なからず知っているだろう。
宗院は思い立ち、供の二人に鎌をかけてみることにした。
「なかなかに現れませんね。宿の主の話では毎晩暴れているとの事だったのですが、姿が見えないという事は、もうこの辺りに飽きて他へ行ってしまったのやもしれませんね。そうなると、私は必要無かった様ですね」

宗院の言葉にお供の二人は明らかに動揺した。
「いや、そんな事は・・・。たまたまでございます。それにまだ一日経っただけではないですか。今後二度と現れないという事は言い切れんでしょう。宗院様は我等を見捨てるお積もりでございますか？」
切実そうなお供其の一、名はじんべえといったか、彼の問いに宗院はさらりとした微笑みと共に答える。
「いやいや、私も今直ぐに去ろうという訳ではないのですよ。ただ、このまま現れない様であればという話です。そうですね、食料が尽きる三日目を目安としましょう。それで現れなければ私はここを発つことにします。毎晩暴れていると言っていたくらいです。それくらいみれば十分でしょう。」
宗院の答えにお供其の二、たすけが返す。
「そんなことを言って、本当は逃げる積もりなんじゃないでしょうな？」
宗院は表情も変えず答える。
「そんな事なら最初からここへ来てはいませんよ。其の点は安心なさって下さい。まあ、鬼と対峙して勝てるかも判りませんが、傷を負わせる位は出来るでしょうから。ただ本当に現れるのでしょうかね？というより本当に鬼が居るのでしょうか」
宗院はわざと嫌味っぽい言い方をした。相手の本心を知るには怒らせて理性を揺らがせるのが有効なのだ。
案の定、二人はそれに乗ってきた。
「まさか、我等をお疑いになられておいでか？」
宗院は畳み掛ける。
「そういう訳ではないのですがね。私も命を懸ける積もりで来ているのに、何も現れないとなると何とも虚しい話しではないですか。今まで鬼が出ていたとしてもこれからも出る根拠もまたありはしないのですから」
「根拠ならある！」

たすけはそう言って「あっ」と自分の口を手で塞いだ。せっかく乗ってきたものを逃す手は無い。となれば尚更に宗院は煽りを続ける。

「ほう。根拠が・・・ですか？」

疑っていますよと言わんばかりの言い方で宗院は尋ねる。

今度はじんべえが我慢ならんとばかりに口を開いた。

「あれは俺らを怨んでんだ。俺らが死ぬまで居なくなったりしねぇ！」

そうやって宗院は彼等を手の平で転がし、結局事情を全て聞き出したのだった。

## 鬼の手（肆）

――わがきみは……ちよにやちよに……さゞれいしの……いわほとなりて……こけのむすまで……――

冷たく湿った土を浴び、生きながらにして地中に埋められてゆく女が其の最中、この歌を何度も繰り返していた。

現代では国歌として知られる曲の原歌である。

彼女は人柱となり、地中へと埋められた。其れは宗院がこの集落にやってくる約二年前の事、歴史で言えば丁度豊臣秀吉が太閤となった頃の事である。この時代のこんな学ぶ場所すらない田舎の小さな集落で、この歌を、しかも其の頃には冒頭の部分が既に変えられている筈の歌の原歌を口にしていた彼女は、この集落ではかなりの教養人であったと思われる。

「君」が誰なのか、そんな事がよく議論になっているが、そんな事は詠み作った人間が決める事であり、特に決まった答えが無いのなら、後に其れを読む人間それぞれが決める事である。

彼女の場合には、この歌を一体誰に捧げたのであろうか……。「君」とは一体誰であったのだろうか……。

＊

「で、なんだかんだで宗院さんは鬼を封印したんだとさ」

「いや、其のなんだかんだが気になるんですが……」

しれっと説明を省略しようとする夏目さんに僕はツッコミを入れた。

「え～、でもそろそろ登場しとかないと主役を宗院さんに奪われちゃうよ～。橘君は其れで良いのかい？」

夏目さんの言っている意味はよく解らなかったが、何と無く其れは困る気がした。
「まぁ、これからが本題だからね。一応は説明するさ」
「夏目さん、一応って……」
夏目さんは、またゆっくりと話し始めた。

「宗院さんは計画通り、鬼を体内に入れ、腹に焼印を入れて鬼を見事封印した。暫くすると宗院さんの右腕、右足、視覚は術の代償として失われてしまったけどね。封印が終わって供二人に抱えられながら宗院さんが集落へ帰還すると、集落の人々は宗院さんをそれはそれは歓迎したんだそうだ。正直、そんなには期待していなかったんだろう。其れが満身創痍とはいえ、あの誰も止められなかった鬼を退治したんだ。宗院さんは集落の英雄になっていたんだよ。そんな中、集落の長から宗院さんに定住の申し出があったのも流れからしてとても自然な事だったんだろうね。足も視覚も失い、旅を続ける事が困難になってしまっていた宗院さんにしてみれば、其の申し出はまさに渡りに船だった。そうして宗院さんは、この地にあった廃寺に暮らし始めたんだ。初めはみすぼらしい姿だった其の廃寺も、集落の人々の信仰心と感謝の念からどんどんと改修され、一年も経つ頃には立派な寺へと生まれ変わった。宗院さんと集落の人々は互いに助け合い、これといった争いも起こることもないままに十年以上の月日が過ぎた。でも、そんな名も無き集落が村と呼ばれ始めた頃、事件は起こったんだ。」
「……一体何があったというんですか？」
僕の問いを待っていたかのように次の言葉をためにためて夏目さんが続ける。
「夢を見たんだ」
「夢？」

「そう夢だ。夢に鬼が出てきて告げたんだ。お前は後数年で死ぬ。そして鬼は共に死ぬ事は無いと」
「どういう事ですか？」
「自分に封印した鬼は、自分が死ぬ時に一緒に冥土に逝く事になる。でも、宗院さんと鬼の力には差がありすぎた。宗院さんが自分の力以外にあの世へ持って逝ける余力が十だとすると、鬼の力は三百くらい。詰まりは、宗院さんの力では鬼の力を持ちきれない。完全に道連れにする事は出来なかったんだ」
「じゃあ、如何するんですか？詰まり、宗院さんが死んだらまた鬼の脅威が村を襲う事になるんですよね？」
夏目さんはコクリと頷く。
「だから宗院さんは策を練った。其の策は現在も引き継がれ、其処に居る敷島君にまで受け継がれている」
今迄ずっと黙っていた敷島に、夏目さんが視線を向けると敷島はそっと右手を出した。手には包帯が巻かれているが、巻き過ぎているのか、何だか左手に比べると大きく見える。
そしてゆっくりと其の包帯をはずしていく。
「これは……」
其の手は何時も見慣れた敷島の手とは違っていた。其れは大きく、まるで……まるで鬼の手の様だ。
「俺の中にも鬼はまだ居る。俺の先祖は、自分が持てるだけの力だけを道連れにし、残りの鬼の力を切り離して代々受け継いで其の受け継いだ全員に同じ事をさせる事にしたんだ。そして俺が最後の一人・・・だったんだ」
敷島は何故かとても悔しそうな顔をして俯いた。

## 鬼の手（伍）

敷島公は、考えていた。

何故自分は毎日朝晩の修行を欠かしてはいけないのであろう・・・。

普通の僧侶であっても訳あって休む事はあるものだ。だが、自分は怪我をしようが病に倒れようが、恐らくは槍が降ろうとも明日地球が爆発しようとも休む事は出来ないだろう。毎日毎日欠かさずに朝早く起きて身を清め、経を読む。来る日も来る日も経を読む。物心付いた頃には既にすり込まれていた習慣だ。

鬼の話は小さい頃から耳にたこが出来る程聞かされている。毎日修行し、経を読まなければ鬼の封印が破れてしまう事も。自分が其れを受け継ぐ最後の人間であるという事も。

決して自分が望んだ訳ではない。此の世に生まれ出た時には既に自分の身体に鬼は入れられていたのだ。

此れを運命と受け入れられれば簡単な話しだが・・・いや、本当の意味で受け入れられる人間なんていやしないのかもしれない。自分は受け入れていると言える人間は、自分を騙しているだけだ。そして自分を騙す事は何よりの罪だ。

敷島はそう思う。

そう思ったから、敷島は家出をしたのだ。

彼自身、そんなに長く家を出る積もりは無かった。ただ、この疑問を解消するには一度修行から遠ざかるしかないと思った。そして、敷島は鬼の事にも疑問を抱いていた。一度くらい修行をサボっただけでそう簡単に封印が解けるものなのか、そもそも本当に自分の身体に鬼が宿っているのか。

もし言われていた事が本当なら、其の答えは翌日の朝には出ることとなるだろう。

兎に角、敷島は確かめたかった。迷いがあるままでは自分が自分

でなくなる様な気がしたから。
敷島は、一晩中街を歩き続けた。泊まらせてくれる友達などいない。だからといって金もそんなには持っていない。頼る相手がいたところで、一所に留まれば自分を捜しに来た人間に見つかるかもしれない。
そう思いながら歩き続け、やっと落ち着けたのは、夜中の三時過ぎ。この街と隣町を繋ぐ大きな橋の下だった。
歩き疲れたのか、敷島は何時の間にか眠りにおちていた。
数時間後、敷島は自分の右手にはしる激痛に呼び起こされた。
見ると、手はビキビキと音を立て、変形していっている。
「うあああああああああああああああっ！」
痛みに悶える敷島は何とかこの変化を止めようと経を読み始めた。だが、苦しみながらの経は途切れ途切れとなり、其の力を出し切れてはいない。
右手はどんどんと大きくなり、もう敷島の頭よりも大きくなっている。
「ぐあああああああああああああああああああっ！」
痛みも増し、敷島の意識が遠ざかろうとした瞬間、橋の上から、ひょいっと現れた影が一つ。
「あ～あ、誰かと思えば、鬼喰寺の息子さんじゃないか」
葬式帰りかとも思うブラックスーツをシックに着こなし、其れとは全く似つかわしくない狐の面を着けた男が一人。
「な・・・つめさん・・・」
夏目さんは、ボロボロな状態の敷島を見詰めて「なるほど」と呟くと、ゆっくりと狐面を外した。
其れと共に敷島の意識は途絶えた。

＊

敷島が目を覚ましたのは、其の日の夕方、見知らぬ家、見知らぬ部屋のベッドの上だった。
辺りに人影は無い。
敷島は、頭の中を整理した。激痛の記憶。最後に誰かが現れて・・・。
「そうだ、右手・・・」
敷島は、シーツに隠れていた右手を恐る恐る見た。
「一応は、治まっている筈だよ。まぁ、完全に元の状態にと迄はいかなかったけどね」
敷島が声の方へ目をやると、其処には何時の間にか夏目さんが立っていた。
確かに右手は一時の大きさではなくなっていたが、やはり何時もよりやや大きい。そして肌は少し赤黒く、形もゴツゴツとしている。此れはまるで、いや、まさに鬼の様だ。
肩を落とす敷島に、夏目さんが優しく言葉をかける。
「君の家にも連絡はしておいた。だから君は心配せずにもう暫くは安静にしておいた方が良い」
「夏目さんが助けてくれたんですか？」
部屋を出ようとする夏目さんに敷島が小さな声で問いかけた。
「そうだよ。といっても僕が出来る事なんて大した事ではないから、溢れ出る鬼の力を吸い込んで、其の勢いが落ちたところで破れかけた封印を簡易的ながら補修しただけだ。今の状態だと何時また封印が破れるか分からない。其れを安定させる為にも、先ず君は、体力的にも精神的にも回復しないとね」
そう言って夏目さんは部屋を出ていった。

＊

其れから今日まで、敷島は夏目さんの家で寝泊りをしているそうだ。
夏目さんの話だと、この街で闇やら妖やらの存在を相手にする者同士、夏目さんと敷島家の間には前々からコネクションがあったらしい。敷島家の現当主である敷島の父にいたっては夏目さんの穴の事も知っているとの事だ。だから敷島の父親も夏目さんに自分の息子を託したのだろう。
敷島の父親からは、自分達には何も出来ないからお任せ致します。と言われたらしい。
敷島の父親も敷島の事を考えているからこそ、こういう決断に至ったのだろうけれど、何だか他人事ながらに寂しい気がする。何と言うか、見捨てられたようなそんな気が・・・。
親であるなら、何も出来ないにせよ、せめて会いに来るべきなのではないだろうか？其れだけで子の心がどれだけ救われる事か・・・。僕は何時の間にか敷島の親に怒りをおぼえていた。
そんな僕の思いを察したのか、敷島が珍しく自分から話し掛けてきた。
「仕方が無いんだ。俺は親の言いつけを破った訳だし、其れに何より、父さんも辛いんだと思う」
敷島は、そう言うと悲しそうに俯いた。
「それでも・・・其れでも、僕は会いに来るべきだと思う。親なら一緒に痛みを分かつべきだろう？子供を守るべきだろう？」
柄にも無い事を言っているのは分かっていた。でも、僕は抑えることが出来なかった。
敷島は、少し驚いた顔をした後、ふっと優しい顔で笑った。
「ありがとう」
敷島の真っ直ぐな言葉に、僕は急に照れくさくなってしまった。そして何も返せないまま、ただ目を逸らしたのだった。

## 鬼の手（陸）

「さて、そろそろ鬼さんと御対面といきますか～！」
次の日の晩、とうとう夏目さんが動いた。
敷島の体調も戻り、ある程度まで精神も安定したと夏目さんが判断したのだ。
僕は別に呼ばれはしなかったのだが、自分から一緒に其の場に居たいと申し出た。僕に敷島の親の代わりが出来るとは思っていない。それでも、誰かが傍に居るだけで少しは安心出来るのではないかと僕は思ったのだ。
夏目さんは、そんな僕の申し出を快諾してくれた。
「さて、始めますか～」
夏目さんの明るい声が洋館の高い天井によく響く。
僕等は夏目さんの案内により、屋敷の地下室へ連れてこられた。一見物置の様に色々な物が置いてある。だが、部屋の中央は広くスペースがあいていて幾つかの陣が書かれている。此処で鬼退治が行われるらしい。
「さ、敷島君、右手を出して。あ、橘君は、ちょっと下がっていてね」
夏目さんに促されるまま、敷島は包帯を外した右手を夏目さんに差し出し、僕は夏目さんの言うとおり壁際へ数歩下がった。
「では、いくよ」
そう言うと夏目さんは例の如く面を外し、敷島の右手に穴を近づけた。夏目さんと敷島の周りには強い風が舞っている。
僕が固唾を飲み込み、見詰め続けて一分程経った頃、一瞬強い光が辺りを照らし、其の後、真っ暗な闇が敷島の右手から勢いよく溢れ出した。
闇は其のまま夏目さんの穴へ吸い込まれていく。
と、急に様子が変わった。夏目さんがよろめきだしたのだ。

僕が咄嗟に駆け寄ろうとした瞬間、夏目さんは敷島を突き飛ばす様に其の場を離れ、そっと面を着けた。
夏目さんは息を荒げ、とても苦しそうにしながら言った。
「弱っているとはいえ・・・流石に倒すのは無理だった様だ・・・」
どうやら鬼退治は失敗に終わったらしい。
「まぁ、初めから其れが目的ではないしね・・・でも・・・此れで光明が見えた。・・・彼女には会えた・・・からね・・・」
そう言って夏目さんは其のまま気を失ってしまった。敷島の右手の闇は何時の間にか止まっていた。

＊

次の日の昼過ぎまで夏目さんは目を覚まさなかった。
やっと目覚めた夏目さんは、昨日の本当の目的を僕達に話してくれた。
「昨日は元々、鬼を退治する積りじゃなかったんだよ。まぁ、下準備みたいなものだ。僕は一度も鬼退治するなんて言っていないしね」
・・・確かにそうだ。夏目さんは一言もそんな事は言っていない。
「あの時、僕は敷島君の手から発せられる闇を辿って敷島君の中に入っていった。封印を解くのに少々てこずったけど、其の後に闇が溢れるのは君達にも見えただろう？」
確かに闇が溢れるのは見えていた。という事はあの光は封印が解けた光だったのか。
「僕は敷島君の中で闇を吸収しながらある人を捜していた」
「誰ですか？ていうか、敷島の中に鬼以外にも誰か居るんですか？」
僕の問いに夏目さんは飄々とした何時もの調子で答える。
「う～ん、鬼以外に居るかと言われると、居るとも言えるし居ない

とも言えるね～」
肝心な所でお茶目というか・・・完全にふざけているなこの人。
まったくもって夏目さんの悪い癖である。
「夏目さん、遊んでいる暇は無いと思いますが？」
僕からのお叱りに「は～い」とまた飄々とした返事をし、夏目さんは続けた。
「鬼っていうのは基本的に元は人間なんだよ。人間自体や人間の魂が怨みや憎しみ、詰まり心の闇って奴に飲まれた時に人は鬼になるんだ」
僕は素直に納得した。確かに人が鬼になるという話しは昔話やオカルトめいた物語で聞いた事があった。
「だから僕は、鬼の元となった人を捜していたんだ」
「いや、其れは変じゃないですか？人が鬼になるっていうのは聞いた事ありますし、分かる気もします。でも、鬼になってしまったってことは、元の人なんてもう・・・」
夏目さんは狐面の鼻の部分を指先で撫でながら僕の問いに答える。
「さっきも言った通り、鬼は闇に飲まれた人間だ。詰まり外は鬼でも其の核には人間が居るんだよ。まぁ、此れだけ長い年月が経っていれば橘君の言う通り、完全に鬼に飲まれて消えていてもおかしくないし、今迄に切り離して冥土へ逝った中に既に居たのかもしれない。でも、核を無理矢理切り離された鬼が、封印が破れたからといって人を飲み込もうと出来る程の力は出せない筈だ。だから後者の可能性は無い。後は完全に鬼に吸収された可能性だけど、引っかかる事が幾つかあってね。多分鬼の中に其の人は未だ居るだろうと思ったんだ。まぁ、殆ど賭けみたいなもんだったんだけどね」
そういって夏目さんはアハハとやけに爽やかに笑った。
「彼女に会えたって言っていたのは其れですか」
夏目さんはコクリと頷く。
「でも、其の人が居たからといって何が変わるんですか？」
夏目さんはフッフッフッと不敵に笑い、楽しげに話す。

「其れはね・・・」

＊

夜になり、僕達はまた地下室へ戻った。
「今度は本当の鬼退治だ。橘君、昨日はあの程度で済んだけど、今回はそうはいかないかもしれない。最悪、僕らは死んで鬼が暴れまわる事になるからね。今なら帰ることも出来る。僕も敷島君も其れで君を責めたりしない。寧ろ希望としては安全な所に避難しておいてほしいんだけど、どうする？」
夏目さんの後ろで敷島も頷いている。
夏目さん達はそう言ったが、僕は残る事を選んだ。危険なのは最初から承知のうえだ。此れは他の誰の為でもない。自分の為の決断だ。此処で逃げたらきっと、後の人生ずっと後悔し続ける事になる。そんなのは嫌だ。夏目さんに襲われると思い込んだあの時、後悔する生き方はもうしないと決めたのだ。ただそれだけだ。
だが、何故だろう。其れを聞いた二人には笑われてしまった。
「じゃあ、始めるよ。」
夏目さんはまたそっと面を外した。

＊

只今、夏目さんが面を外し、敷島の右手に近づけてから約一時間が経過した。
相変わらず、夏目さんの穴によって起こる風は治まることは無い。其れ以外にも此れといった変化は無い。

ただ、夏目さんと敷島が経を唱え続けているだけだ。
そういえば、今回は封印を破った時のあの強い光も無かった。いったい、今此の場所で何が起こっているのであろうか・・・。僕には皆目見当もつかなかった。そんな時、
「・・・」
「ん？」
状況が分からず僕が少しイライラし始めた頃、ふと何かが聞こえた気がした。何か女性の声の様な・・・。
「・・・南無・・・」
確かに聞こえる。夏目さんと敷島以外に女性の声が。・・・どうやら気のせいではない様だ。
「南無妙法蓮華経如来・・・」
最初は微かだった其の声は次第に大きくなり、今では直ぐ其処で経を唱える夏目さん達よりも大きく聞こえる。
其の時だった。敷島の右手から強烈な、しかし前回とは何か違う目も眩む様な光が辺りを包み込んだ。
目を凝らして見てみると、敷島の右手から何か靄の様なものが溢れ、夏目さんの穴に吸い込まれていく。其れが全て夏目さんの穴に収まった所で、夏目さんは面をサッと装着した。
夏目さんも敷島も息が荒く疲弊した様子で、直ぐにその場にぐったりと倒れこんでしまった。
「はぁ・・・はぁ・・・終わった・・・」
夏目さんの其の言葉で僕はやっと鬼退治の終幕を知った。
二人は暫く動く事も出来ず、乱れた息遣いが只々地下室に響いていた。

## 鬼の手（完）

「・・・。・・・・院。・・・・宗院」
誰かが宗院を呼んでいる。
暗闇の中、宗院が目を凝らしていると、闇の中から一人の女が現れた。
女はなんとも不思議な雰囲気を持ち、優しいような、怖いような、妖しくとても美しい姿をしている。
「宗院、やっと逢えたな」
女の一言で宗院は全てを理解した。
「これはこれは、真に久しいですね。貴女を我が身に封じて幾年経ったでしょうか・・・」
そう、彼女はあの鬼である。この姿は鬼となる前の本当の彼女の姿なのだろう。
「して、私に何の御用でしょうか？封印の刹那に交わした彼方との約束はちゃんと守っておりますよ」
宗院が訊ねると、女はふっと微笑んで答えた。
「ああ、其れには感謝しておるよ。あんな一方的な願いを約束と思うてくれている事にもな」
二人の間に、怨みや疑心等は全く見る事が出来ない。其の姿はまるで古くからの友人同士にさえ見える。
「人の心は、弱い。自分達の常（つね）から外にあるものには恐怖を抱く。恐怖故に攻撃をする。消し去ろうとする。そんな事は初めから解っておった。じゃが、私の愛しい娘を殺した事は赦せなかった。力有する故に人柱に選ばれ、其れを受け入れたは、娘の幸せを長達が約束したからじゃ。なのに奴等はたった一度の天災に私を疑い、嫌がる娘を新たな人柱として埋めた。未だ三つの娘を。娘には力も無かったというに・・・」
そう言って俯き、涙を流す女には、娘への愛情の深さが滲んでい

る。
「でも彼方は、気付いたではないですか。だから私に、この場所に住む人々を託したのでしょう？」
宗院は、とても優しく、そして力強く女に声を掛けた。
「お前がこの地へ来る前日、私はあの道を通ろうとした荷を襲った。そして其れを運んでいた者達の手足を千切り、食していた。痛みに叫び、そして最後には声も出なくなっていく様を楽しんでおった。其の時じゃ。荷の中から一人、子供が出てきたのじゃ。其の子供は泣いておった。当然じゃ。目の前で親達が化け物に残酷に殺され、食されているのじゃからな。じゃが、其の泣き声を聞いた瞬間、私の中の・・・理性とでもいうものが顔を出したのじゃ。其の子供は男（おのこ）であったが、面差しがどことのう娘に似ておった。私は、居た堪れのうなって森へ逃げ帰った。其れからお前の前へ姿を現す迄の数日、私はお前を観察しておった。お前が信頼に足る人間かどうかを。供と話しているお前の姿を見て、私はお前の事を信頼できると思うた。鎌をかけて真実を言わせた後も、お前は奴等を軽蔑する事は無かった。そして、私に対して詫びろと説教までしておったな。其れは人の弱さを知っている人間だから出来る事じゃ。お前にならこの地を託せる。そう思うたのじゃ。人は弱い。じゃが、そんな奴等でも、正しき方向へ導く事が出来る人間が居れば、必ず変われる筈じゃからのう」
女は何時しかフフフと笑っていた。
「そして私の前に現れたのですね。私に封印される為に」
「そうじゃ。しかし、お前には悪い事をしたと思っておる。わざわざあの様な大技で身を削らせてしまった。封印されるにしろ消し去られるにしろ、私が素直にやられればいい話なのじゃが・・・」
再び俯く女に、宗院は微笑って答えた。
「ああでもしなければ、この地に住まう者達が素直に私を信じてくれたとは思いません。それに、身を削り、旅が困難になったからこそ、長も私に定住を申し入れたのでしょうし。まぁ、命を失ってい

たら意味も無いのですがね」
宗院はアハハと大袈裟に笑ってみせた。
女もフフフと笑っていた。だが、女の顔は次第に暗くなっていった。
「如何したのですか？」
宗院の問い掛けに女は意を決し、ゆっくりと語りだす。
「今日はお前に知らせねばならぬ事があり、参ったのじゃ」
女の顔は、険しさを増していく。
「お前の命、もって後三年というところじゃろう・・・。お前が死ぬ事自体とても悲しい事なのじゃが・・・」
女は言葉に詰まり、数秒の沈黙の後、本題を口にした。
「私も最近迄気付いておらなんだのじゃが・・・お前の力では、私の・・・鬼の全てをあの世へ運ぶ事は無理なのじゃ。お前の死期が近付き、力が弱まった事で其れに気付いた。やはりあの時、私が何もせずにやられておれば・・・」
女は涙を流し、両の手で顔を覆った。
「知っていました」
意外な答えを口にした宗院に、女は顔を上げた。
「私の身体は元より強い方ではありませんし、あの術を使うと決めた時には死を覚悟しておりました。其の時に死せずとも、私の躰（うつわ）では、そう長くはもたぬ事も考えてはいたのです。貴女を封印した時、何とも無しにではあるのですが、私には持て余す力であると感じ、尚更に実感致しました。其の頃から既に策は考えておりますし、其の協力者となる女性も既に見付けております。行き着いた策は少々酷ではありましたが、解ってくれるでしょう・・・」
宗院の瞳は遠く、未来を見詰めている様だった。

＊

「此れで一安心だな」
夏目さんの家からの帰り道、僕は敷島に笑顔で言った。
静かな夜明け、昇る太陽に照らされながら歩く僕達の頬をひんやりとした風がなぞる。
「ああ、一応、未だ父さんの中にも残っているんだけどな。まあ、ちゃんとあの世へ連れて行けるだけの力しか残っていないから、安心といえば安心だけど」
冷静な敷島の応答に、僕は少し笑ってしまった。
「それにしても、あのお経の声が夏目さんの言っていた鬼になった人なんだよな。思ったより優しそうな声だったな」
僕は、地下室に響いたあの声を思い出す。芯があるが、包み込む様な優しさを感じる声だった。
「彼女が悪い人間だった訳ではない事は昔から聞いてはいたんだ。彼女が鬼の力を抑え、内側からも経で鬼を圧縮する事をしてくれた。鬼である彼女自身の協力が無ければ、俺がこんな気持ちで朝日を見る日は来なかったんだろうな」
敷島はそう言って昇る太陽に向かい手を合わせた。僕も其れに倣い、目を瞑って手を合わす。
目を開けた瞬間、心なしか、太陽が微笑んで見えた気がした。
僕等は、それぞれの家の方へと別れ、互いに振り返って叫んだ。
「じゃあ、学校でな！」
僕は、初めて本当の友が出来た気がした。

## 夏目の仕事（壱）

「いや～、大変だね～」

夏目さんは、そう言いながらソファーの上で伸びをした。其の姿は、まるで日向ぼっこをしている子猫の様に無邪気で気持ち良さそうだ。

だが、夏目さんがそうしている事はおかしな事なのである。そして、夏目さんは猫というより、見るからに狐である。

南側にある小窓から差し込む光が、舞い散る埃を照らす中、本日、僕と敷島は、夏目さんの家の掃除にかりだされている。

「悪いけど、手伝ってほしいんだ」そう言って下からやってきた筈の夏目さんの態度は、今となっては見る影も無く、本人はすっかりだらけ、其の周りを僕達二人が懸命に作業するという光景が掃除を開始して直から続いている。

まぁ、僕には最初からこうなるであろう事は分かっていた。

あの闇の一件から三ヶ月弱が経つ。僕は、其の間の殆どの日数は夏目さんと過ごしてきた。夏目さんの行動パターンの大体は読めている。

それでも何故、僕が此処に来たのかといえば、其れは、敷島に頼まれたからであった。

＊

「こんなもんか～！」

ある程度の整理が終わり、僕はゴキリと首を鳴らせ、其の首を擦りながら大きな声で言った。

敷島もう～んと呻きながら、伸びをして背中の筋を解している。

「いや～、御苦労様！」
夏目さんの無駄に元気な声が僕を少しイラッとさせる。
「結局、何もしませんでしたね」
僕は、ギロリと夏目さんに鋭い視線を向けた。だが、僕の言葉と視線からなるナイフは、するりとかわされ、夏目さんは、スキップをしながら早速と言わんばかりに紅茶の用意を始めた。
僕は、大きなため息をついた。
僕が呆れていると、今迄ずっと黙っていた敷島が口を開いた。
「あの、これ」
敷島の手には長細い箱が持たれている。
「これ、この間の代金代わりだと、父が・・・」
そう言って差し出された箱を、夏目さんは、コクリと頷き、静かに受け取る。
僕は、こういう光景を何度か目にしていた。
毎回、怪異を退治したり、呪いを解いたりした後、夏目さんは、其れを頼んだ人からこうやって、何かを受け取っている。
其れは、時にお金だったり、時に物だったり、時には生き物だったりもする。
僕の場合には、闇の事でロールケーキ五十本を分割で払うという事になっている。
そして敷島の場合は、此の箱。開けてみると中には古めかしい掛け軸が入っていた。
夏目さんは早速、するすると紐を外し、掛け軸を広げてみる。
「お、龍か～。これは貴重だね～」
そう言って夏目さんは、妙にニマニマしながら其れを僕達にも見せてくれた。
「・・・え？」
其処には、確かに龍が描かれていた。だが、其の龍は一所に止まらない。掛け軸の中でまるで生きているかの如く蠢いているのだ。
「動いている・・・」

そう呟いた僕に、夏目さんは少し驚いた様子だった。
「おや、見えるのかい？」
僕をじっと見詰めて夏目さんが問う。
「ええ。龍が掛け軸の中で動いていますよね？まるで生きている様に」
僕が答えると、夏目さんは感心した様に言った。
「此れは、力がかなり強くないと見えないものなんだよ。橘君は、霊力がかなり強まっているみたいだね。此れが見える程の人間なんてなかなか居ないよ。其の証拠にほら」
夏目さんの視線の先に居たのは敷島だった。敷島は、不思議そうに僕達のやりとりを見詰めている。
「敷島、見えないのか？」
僕が尋ねると、敷島は不思議そうな顔のまま答えた。
「いや、龍は見えるんだ。でも、動いては見えない」
驚いた。僕にはこんなにもはっきり蠢く龍が見えているというのに、本当に敷島には見えていない様だ。
「この掛け軸は、見る人の力や状態によって幾つかの違う姿を見せる。霊的能力の殆ど無い人には白紙に見える。少しだけ能力がある人には背景だけが見える。敷島君みたいに普通の龍の掛け軸に見える人は、人間としては非凡な力がある。そして、普通には略居ないんだけど、橘君みたいに龍が動いて見える人は、生活に支障が出るくらいの、普通の人間には持て余す力を持っているんだ。因みに僕は、闇の力があるから例外的に見えているんだけどね」
正直、思い当たるふしが無い訳でもなかった。闇の一件以来、僕は日に日に霊や妖怪、怪異の類が見える様になっていた。最近では霊なのか人なのかの判別も見た目には難しい程だ。
しかし見分けるのは簡単だった。何故か霊的な類の者は僕を見ると逃げていくか、襲ってくるかのどちらかなのである。夏目さんの話しから察するに、恐らくは強すぎる僕の力に弱い霊は近づけず、強いものは其の力を奪う為に僕を喰いたいのであろう。

「なるほど」
僕が、そう言おうとした寸前、其の言葉をこぼしたのは敷島だった。
「正直、父から此れを渡せと言われた時には、何故夏目さんに此れを渡さなきゃいけないのか解らなかったんです。俺から見たら只の掛け軸ですから。あくまでも対価。普通の掛け軸と何百年も掛かっていた鬼を消すという事。其れは比べるまでも無く礼として足りていないと思って。でも、今の話しで理解出来ました」
敷島は、自分の中の謎が解けてスッキリしたという感じだ。そして敷島は僕に言った。
「橘、悪かったな。ちょっと不安だったから来てもらったんだけど、杞憂だったみたいだ」
敷島の真面目さに改めて少し驚いたが、其れと同時に、敷島に信頼されているんだと実感し、僕は嬉しい様な照れくさいような気持ちになった。
それにしても、対価とは、そんなに重く捉えるものなのか。僕の対価・・・ロールケーキ・・・。
僕は、取り敢えず考える事を止め、夏目さんが淹れた紅茶をコクンと喉に通した。

＊

数日後、僕と敷島が夏目さんの家へ行くと、見知った顔があった。
「小林先生？」
夏目さんの家のソファーに腰掛け、紅茶をすすっているのは、うちの学校の教師。そして敷島が学校で浮くきっかけとなったあの時、敷島に掴みかかったその人である。
「橘。お前、なんでこんな所に・・・敷島もいるのか・・・」

先生は、そう言って目を逸らした。
其の姿を見て僕は少しムカついた。
先生は、あれから敷島に対して謝っていない。あれが偶然だと思うのも当然な話しだが、敷島に掴みかかった事に対しても全く謝罪が無かった。
今も敷島は、学校では何も話さない。僕から話し掛けても、僕に気を遣って何も言わない。
あの時以来、言葉を発さなくなった敷島の気持ちを思うと、胸が痛くなる。
だが、僕も偉そうな事は言えない。あれから夏目さんの家で会うまで、僕は自分の保身を選び、敷島に声一つかけなかったのだから。
僕は、怒りを押し殺し、先生に問い掛けた。
「先生こそ、なんで夏目さんの家に居るんですか？」
僕の問いに、先生は一瞬ビクリとしたが、直ぐに平静を装って答えた。
「其れは・・・本を借りに来たんだ。此処は図書館並みに本が揃っているからな」
先生はそう言ったが、僕は嘘だと直覚した。先生は、僕等と目を合わせようとはせず、汗をかき、少し息が荒く、震えた手を隠そうと、不自然に両の手をポケットに入れた。
此の人は、どうやら嘘が苦手らしい。
そうこうしている内に、夏目さんが二階から降りてきた。其れを見た先生は、慌てて席を立った。
「な、夏目さん、今日は失礼します。用事を思い出しましたので、それでは！」
そう言って夏目さんが止める暇も無く、先生は足早に出て行ってしまった。
「あ～あ、行っちゃった・・・」
夏目さんは、先生が出て行った扉を呆然と見詰めている。僕達もよく解らぬまま其の場に立ち尽くしていた。

「小林さん、急がないと死んじゃうんだけどなぁ」
極自然に夏目さんの言葉が僕等の耳元を通り過ぎ・・・・・・そうになったのを僕はむんずと捕まえた。
「え？今何と？」
夏目さんは、二階の踊り場の手すりに頬杖をついて答える。
「うん、まぁ今直ぐって訳ではないけどね。近いうちに」
そう夏目さんが言った途端、乱暴に扉の開く音が聞こえた。振り向くと、先程まで見詰めていた扉が全開になっている。
そして、其の扉の向こう、四角く切り取られた外界には、敷島が走り去る後姿があった。
「真っ直ぐだねぇ」
僕と夏目さんは、其の後姿を只呆然と見送った。

## 夏目の仕事（弐）

僕達が夏目さんの家にやって来る一時間程前の事、夏目さんの許に文が届いた。

文といっても普通の文ではなく、其れはひとりでに宙に浮かび、矢の如く空を飛び、夏目さんの家へやってきて、換気の為に開けてあった窓から中に入り込み、読書に耽る夏目さんの手に広げられた本の上へひらりと舞い降りたものだ。

「・・・ああ、海（うみ）さんか」

夏目さんは、文の内容を見るまでも無く、其の文の送り主を言い当てた。

なにせ此の文は、見るからに何かのメモの切れ端を利用しており、其れに特別な力を込めて此方へ送ってきた。そんなものぐさな人間は夏目さんの知り合いでは其の海という女性しかいないとのことだ。

夏目さんは其の文を広げ一つ溜息をついた。文にはこう書かれていた。

やぁやぁ夏目君。私はそれなりに元気なのだが、君は元気かな？

まぁ元気だろうな。うん。そうだろう、そうだろう。

まぁそんな事はどうでもいい。今回君に文を認めたのもほかでもない。いや、ほかもない訳ではない　が、取り敢えずほかでもない。

最近私の所へやって来た客を其方へ譲ろうと思ってね。

いやいや、礼には及ばんよ。私もこれ以上に稼いでは運の波の引き時が怖いからね。

それに、其の客人は、どうやら君の家の近くに住む人間らしい。

此れも縁だ。宜しく頼むよ。

追伸　もう謝礼は貰っているからあしからず。

「まったく、勝手な人だ。まぁ、海さんらしいか・・・」
そう呟いて夏目さんは入り口のドアを見詰め、其方に向かい一言呼びかけた。
「開いていますよ～！」
其の声に重い扉がゆっくりと開く。
「失礼致します」
入って来たのは、長身のひょろりとしたスーツ姿の男性。小林大地だ。
「おや、まさか小林さんが来るとは思いませんでしたよ」
夏目さんがそう言うのも当然な事だ。小林先生は此の街では有名な超現実主義者なのだ。
それは、彼の知らぬ場でクラッシャーという異名がつく程だ。
幼気な少年少女の夢を容赦無く理屈を並べていとも容易く打ち砕き、彼の通ったあとには子供の泣き声が延々と響く・・・という都市伝説的なものがあったりもする。
そんな彼が、オカルトめいた世界にやって来るとは彼を知っている人からすれば、考えられない事だ。
「私も、夏目さんがこんな如何わしい仕事をしておられるとは思いませんでしたよ・・・」
小林先生は、自分のプライドを守る為か、少々攻撃的だ。だが、夏目さんはそんな事を気にも留めない。
「まぁ、お座りください」
そう言ってそそくさと客人に紅茶を淹れてきた。
淹れた二杯の紅茶を小林先生と自分の前にそれぞれ配置し、先生の向かいのソファーに腰掛けた。
「さてと、ではお伺します。何時から罪悪感に苛まれているんですか？」
罪悪感に苛まれる。此れは別にあの手紙に書かれていた訳ではない。夏目さんは、既に全てを見透かしていた。先生の来た理由も意味も。

＊

夏目さんから話を聞いている最中、後ろでカチャリとドアが開く音がした。
振り向くと其処には全身傷だらけの敷島が立っていた。
「敷島、どうした！」
僕の問いに敷島は目を逸らし答えた。
「なんでもない。只、派手に転んだだけだ。・・・今日は此の辺りで帰るよ。それじゃ。」
そういって敷島は、自分の鞄を持ち足早に出て行ってしまった。
呆然と見送った僕の後ろで、夏目さんが小さく漏らした。
「う～ん、小林さん思った以上にヤバいかもしれないなぁ。敷島君も生真面目だからな、放っておくと巻き込まれるかもしれない」
今の流れからすると、敷島の傷は小林先生がつけたということか。
敷島の言葉の嘘には気付いていたが、まさか小林先生とは・・・。
小林先生は暴力をふるうタイプの人間ではない。前に敷島に掴みかかった様な事もあの時にしか見た事は無い。
僕は考えが纏まらなくなってしまい、夏目さんに直接訊くことにした。
「夏目さん、教えて下さい。小林先生は今どんな状況に置かれていて、敷島は何をしようとしているんですか？」
「うん。じゃあ、先ず、さっきの話しの続きを話そう」
夏目さんはそう言ってソファーに腰掛け、続きを語り始めた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2487u/

闇の狐

2011年12月29日06時52分発行